

---

# 赤い目のお姫様。

くらあい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い目のお姫様。

### 【Nコード】

N1072K

### 【作者名】

くらあい

### 【あらすじ】

『アイトス』のコードを刻まれ本来生まれるはずでないラテアの世界に柚葉の双子の妹として生まれおちてしまった、冬華。その身に宿した白と赤は『あの世』に染まりしかかして、家族は冬華を異端分子として排除を始める。柚葉からは隔離され、独りで過ごしていた部屋を抜け出したとき、そこには絶望と希望が混在した。いまはもう、夢に見ても顔をはっきり思い出すこともできないあの人と、私を受け入れてくれた世界のかげら。そんな、私たちの話。自ら異形となりて世界を変えようとした一人の男と、人になりて世界

を変えようとした異形の男の子。そして、二人が愛した一人の女の子のお話。

あなたを世界が嫌うなら。(前書き)

藤原冬華の過去編。

実は、藤原冬華って本名じゃないんですよね。

本編にもだいぶ関係が出てくるんじゃないかと。番外編って感じにはならないかと思えます。

恋愛色はそんなに強くないです。

あなたを世界が嫌うなら。

泣き声が聞こえる……

遠くにあって近くから。触れられそうで触れられないところから。

とろりとろりと波に揺られているようにはっきりとしない意識を、無理やり引っ張り起こす。

かすんだ視界の向こうには、小さな女の子が見える。御伽噺に出てくる銀孤の毛並みのような白い髪と、ルビーのように紅色の目。

昔は嫌いだった、でも、いつの間にか嫌いじゃなくなった『私だけの色。あの人が好きだった色。』

― ああ、またいつもの夢か―

ふと、視界の端から手が伸べてきてその女の子を抱っこする。

「この世界じゃ、お前が笑ってられないのなら。俺は、世界を壊しに行こう。たとえば、その先で俺がお前の傍にいれないとしても。」

これは、自ら異形となりて世界を変えようとした一人の男と、人になりて世界を変えようとした異形の男の子。そして、二人が愛した一人の女の子のお話。

世界が私を嫌った日。(前書き)

えーと、この時点でまだ冬華は喋れないのでカッコとハイフンで音を発しているものと、気持ちが発しているものを分けています。

もしかしたら多少読みづらいかも知れませんが、ご了承くださいませ。

世界が私を嫌った日。

私が物心ついたころには、私はいつも一人だった。

子供の体には少し大きめのベッド、当時の私の背丈ほどしかなかった小さな本棚、空と森と遠目にかろうじて見ることのできる街並みを切り取っている窓、そして、ベッドの上でご飯が食べられるように工夫された机。

それが私の世界のすべてだった。

誰とも喋らないためにろくにしゃべることもできず、本棚にあった本は絵に申し訳程度に文字が載っているだけで、世界を知ることができなかった。ただただ、絵本の絵と窓から見える景色のわずかな変化だけを眺めて過ごしていた。

だから私は知らなかった、何も。楽しさも、優しさも、苦しみも、絶望も。

私自身のことさえも。

私の日常は空白で満たされていた。

あの人に会ったのは、遠くに見える街並みのさらに遠くにあった山頂の雪が解け始め、春を告げる詩鳥がさえずりを練習し始めたころだった。まだ、その時は日付の何も知らなかったから正確に何時だったのかはわからないけど、窓の近くでなく詩鳥のさえずりをまねしようとしてたことだけは確かだ。何せ、それが遠因で彼に会えたのだから。

常世から切り離され何も分からないなりに考えたんだろう、詩鳥の声を聞きたかったのか本棚によじ登ってメイドの見よう見まねで窓を開けようとして、不意に開いた窓に運動をろくにしていなかった私がバランスを保てるはずもなく　　青く蒼くアオイ空の中を独

り泳いでいた。

空は近くて、少し手を伸ばせば雲にすら触れそうで、ああ、世界は私を拒絶しないでいてくれるのとうれしくて

気がつけばいつの間にか手を伸ばしていて、でも、届くはずもなく、指と指の隙間からのぞく太陽の木漏れ日が、空が、雲が、世界が、胃がひっくりかえるような浮遊感とともに離れていく。

ああ、また私は・・・

そう思って目を閉じた途端に体を襲った衝撃に私の意識はいとも簡単に飛んだ。



だ！！……こんな知りたくない……痛い、痛いよ！！！！  
あ、……

そこまで考えがいたって急に痛みがフィルターが掛かったかのように遠く鈍くなる。

「これが、イタイ……？」

口から肺の中の空気とともに絞り出される声。それは、若干かすれて呂律もはつきりしない声だった。

ずくずくと心臓の拍動に合わせて押しは引く痛み。しかしそれはもう、私にとって大きなものではなかった。  
視界に映っているだけの木も、小さな空も、「私」という存在までも。すべてが遠くに感じた。

「ああ、この「世界」に私の居場所はないのか」

頬を冷たいものが伝う。体に走る鈍痛を無視して手を動かす。

「……み、ず？」

指先をかすかに濡らしたのは、いつの間にか目からあふれ出した水だった。

「これ、たしか……」涙「っていうんだっけ」

っ

もう一筋冷たいものがほほを伝う。

気づかないうちにあふれ出した涙。

それをとどめるすべなど、あふれ出して決壊してしまった気持ちを

とどめるすべなど

私は持たなかった。

世界が歪む。

「

」

声にならない声、言葉で区切ることのできないモノ。  
何が嫌だったのか、寂しかったのか。その時はわからなかった。

ただただ、体よりも心が痛み悲鳴を上げていた。

叫んでいないと心が壊れてしまいそうだった。

私はジュジュる

♪。

♪

私を見つけてくれ

世界が私を嫌った日。（後書き）

えーと次回予告？

主人公というか、準主人公の男の人が登場します。

あと、少しだけ戦闘シーンも。

来週辺りはちょっと忙しいので、次は二週間後ぐらいになるかと思  
います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1072k/>

---

赤い目のお姫様。

2010年10月15日21時03分発行